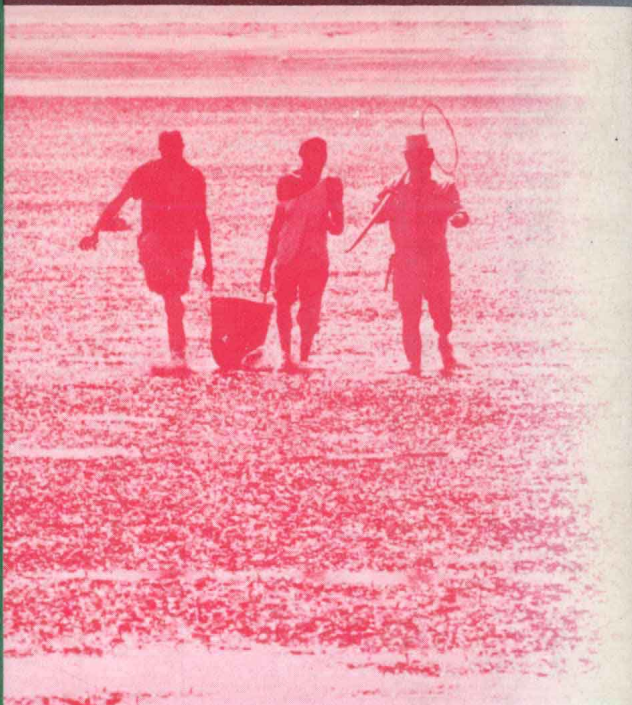


第2部

|| 日本青年海外協力隊の記録 ||

俺たちの異郷



●エル・サルバドル
●マランウイ
●ザンビシア
●シンリ
●ネパール

●対談

蔵大 柳草 伴正一



第2部

日本青年海外協力隊の記録

俺たちの異郷



第二部 俺たちの異郷

= 日本青年海外協力隊の記録 =

1973年 4 月30日初版発行

編 集 桑原 晨

発行者 山田健一

発行所 株式会社文遊社

〒113 東京都文京区本郷 1 丁目25番 1 号

電話 東京 (03) 815-7740

振替 東京173020

印刷・奥村印刷 製本・白信製本

©1973 Bunyusha

定価 680 円

目次

俺たちの異郷

エル・サルバドルの情熱

青木美彌子 6

森平義昭 48

マラウイの陰翳

磯崎省二郎 76

ザンビアの光茫

宮原征人 112

佐々木法水 150

シリアの神秘

吉村徳政

168

河江利弘

214

ネパールの郷愁

西野誠一

240

山本次生

262

対談

「日本人と協力隊」

299

評論家 草柳大蔵

日本青年海外協力隊事務局長 伴 正一

付・日本青年海外協力隊関係資料

343

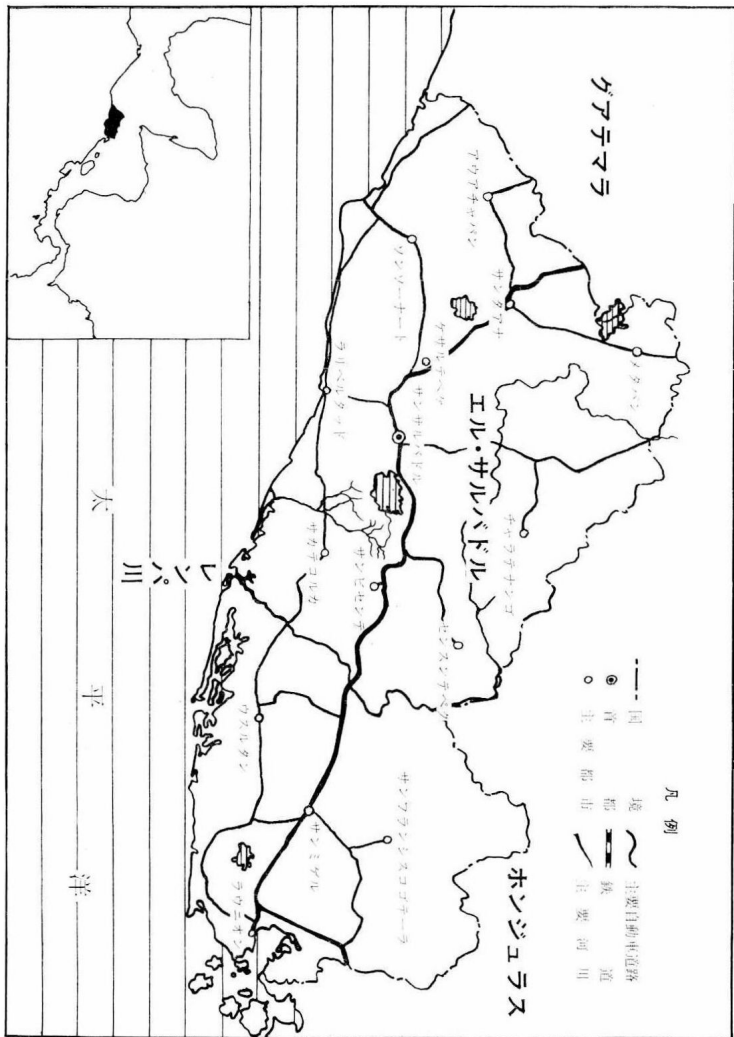
派遣業種（国別）実績

各国別派遣現況分野表

派遣国の概要

俺たちの異郷

エル・サルバドル全図



エル・サルバドルの情熱

(一)

青木美彌子



青木美彌子（あおきみやこ） 昭和十九年四月二日東京都生まれ。東京教育大学大学院卒業。四十六年三月三十日から四十八年三月二十九日までエル・サルバドル文部省に配属され、首都サンサルバドルの美術高校で絵画、彫刻等の技術指導にあたる。

●太陽と緑がもたらすもの

あのころ 一九七二年十二月、アポロ十七号のニュースが、連日新聞をにぎわしているとき、合衆国の裏窓と言われるセントラル・アメリカの中で最も小さい国、ここエル・サルバドルでは華やかなクリスマス準備が各家庭や商店街などで着々と進められています。といっても、日本とはだいぶ趣きが違ってカンカン照りの太陽の下ですが。

ラジオからはCMのたびにおなじみのクリスマスソング、新聞はどのページもプレゼント用の品物の宣伝ばかり。市内の大通りには、色のついた電球や太いモールで作ったデコレーションが道幅いっぱい張りめぐられ、大きなビルには、壁面全部にモミの木やエンゼルを形どったイルミネーションが飾られて、特に夜は一段ときれいです。

また、まわりの景色で珍しいのは、パスクワ（ポインセチア）が、このころになるといっせいに色づくことです。東京のデパートで、たった一つしか咲いていないのが何千円もするなんて考えられないほどで、どこかの家の中にも、道端の雑草の中にさえふんだんに見られ、大きいのは、高さ周囲とも二、三メートルもあります。それが、今まで緑色だった葉の先端が真紅に変化した花（？）を二十も三十も燃えるようにつけている眺めは、ほんとうに豪華で美しいものです。

もう一つ、心をなごませてくれるのは無数の白い蝶の出現です。毎年この季節になると、何百、何千という数の真っ白い蝶がところかまわずわくように現われてくるのです。遠くから見ると、まるで紙吹雪かゴミのようですが、近寄ってみると、それがすべて一、二センチの小さな蝶なのでびっくりしてしまいます。

こんな中で、私の任期もあと三か月余りになってしまいました。早く日本へ帰って「おすし」や「うなぎ」を食べたいとも思うけれど、もう二度とこの国へこられないことを考えると、やっぱりあと一年ぐらいはいたいような気がします。

ふりかえて、はじめて飛行場に着いた日のことを思うと、まだ新鮮な驚きがそのままによみがえってきます。あのころ（昨年三月末）は飛行場からの道に、八重桜とそっくりな花がたくさん咲いていて、みんな「サクラだ、サクラだ」と騒ぎ、いい気持になっていたのもつかの間、しばらくして車がセントロ（中心街）にはいり、例の汚ないゴミゴミした所を通ったら、まずわれわれの仲間が誰でも感じるように「これはたいへんな所にきちゃったのじゃないかしら」と思ったものでした。

家並みはちょうど西部劇の古くなったセットという感じで、軒は低く、ペンキのはげた壁と汚ない小さな窓、扉もないような入口に腰かけている乞食の子供たち。

でも、そのあと協力隊の事務所にひとまず落着いたときは、ちょうど東京の青山のような高級住宅地で、家も道路もきちんとして美しい所でしたので、ホッとしましたけれど……。

「これから二年間、美術を教えるといっても、私はいったいどんな生活をするのかしら？」

やっと目的地へ着いたうれしさと未知への不安で、長い飛行機の旅で疲れていたにもかかわらず、なかなか寝つかれなかったのを覚えています。

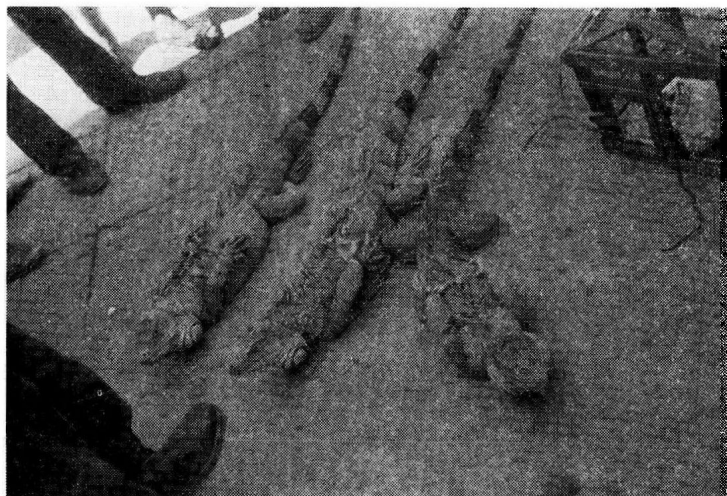
こんなふうにして始まったエル・サルでの生活を一年八か月たった今、まだ頭の中がモヤモヤして未消化の状態ですが、そのままに述べてみようと思います。

太陽 エル・サルバドルは気候的には雨期（五、六月～十月）と乾期（十一月～四月）に二分され、最も暑いのは乾期の終わり三月から五月にかけてです。とにかく約半年間ひと雨も降らずに、ただカンカン照りの太陽が出ては引っこむだけです。このころはもう何もかもが雨に飢え、それが最高点に達していると言っているでしょう。

木も草も人間も、すべてが一日も早く雨の降ってくれるのを待っていて、私たちにとって最も身体にこたえるいやな時期です。バスを降りて、学校に着くまでのたった五、六百メートルでさえ、歩くのを思うと気が重くなります。

が、他の隊員が働いている体育学校では、ここよりもっと暑いのに一日中野外授業をしているのですから、ぜいたくは言えないと思うのです。この炎天下で走りまわるのはたいへんなことです。帰国まじかの隊員が、よく新隊員に「ボケた！　ボケた！」と言われますが、それは単に二年間、外国生活を送ったためだけではなく、この強烈な太陽の影響もそうとうにあるのでしょう。地形的に言うと、首都サンサルバドルは標高九百メートルの所にあるので、北緯十三度のわりには、過ごしやすいはずなのですが。

また、逆に最も過ごしやすく、日本の秋をなつかしく連想させるのが、十月末から十一月、雨期



とらえられたイグアナ

の終わりのころです。太陽の位置もだいぶ南に遠のき、雨で汚れはみんな洗い流されて、木々も十分に養分をとって、ほんとうに空も緑も美しい時です。十一月末からは風も吹いて、夜はときどき肌寒く、セーターが欲しくなるくらい。ちょうど、この一年間の授業も終了し、学年末休暇になるので、精神的にもホッと一息つける楽しい季節です。

緑 こういう気候のため、自然はたいへん豊かで目をみはるばかりです。ここは乾期になっても地下水が涸れず（それが世界の七不思議の一つと言う人もいますが）、隣国のグアテマラやメキシコに比べても確かに緑が豊富です。

そして、木々の成長の早いこと。みるみるうちに五メートル以上の大木になりますが、そのかわり木質はもろくて、折れやすいようです。そのためか、半年に一度ぐらいは必ず半分以上の枝をおろして丸坊主にしてしまうので、見ているともっ



メルカード(市場)

たいないと思いますが、風が強くとすぐ折れるので危険だからとのこと。でも、もと通りになるのもとても早いようです。

また、ちよつとした所にすぐコケやシダ類、宿り木などが密生するものももしろい眺めで、道路からちよつと奥へはいると、まるでジャングルみたいです。名物の大きなイグアナ(トガゲ)も出てきますし……。

そして、われわれ日本人にとってもっともっと驚きなのは、これらの木々が例外なく原色の美しい花をあふれるばかりにつけることで、木によっては年に二回、または一年中咲いているのもたくさんあります。

そのあとにできる実がまたうれしいことにすべてと言っているほど食べられるのです。だから、あるサルバドレーニョ(サルバドル人)が一コロン(百二十円)しか持たずにテクテク歩いて——ときどきヒッチして——南米のペルーまで(その

間にホンジュラス、ニカラグア、コスタリカ、パナマ、コロンビアなどの国があります）行くと聞いてもびっくりすることはありません。彼自身も言っていたように、道端になっているマンゴ、パイア、バナナなどを食べていれば決して餓死することはないのですから。

日本では考えられないことですが、とにかく栄養失調や病気は避けられないとしても、着の身着のまま、裸足でその辺にゴロ寝しても凍死なんてありえないし、飢えをしのぐぐらいの食物は手を伸ばせばいくらでもあるのです。だから、どうしたってこの炎天下でアクセク働くのがいやになってしまいます。

確かに、この太陽の下では、日本人並みに働いたらすぐに身体がバテてしまうでしょう。スペイン、イタリア、その他南方諸国でのシイエスタ（昼寝）は、やっぱり考えられた習慣だと思えます。そのせいで、南方人はなまけものと言われてしまうのですが、それがいいか悪いかは別としても、イザヤ・ペンダサンの言うような、「あくせく稲の世話をしなければ、とたんに飢え死にという状態におかれた日本人」とはほんとうに対照的です。

メルカード（市場） 私の下宿のそばには街路樹が整然と植えられています。実がなり始めると学校帰りの子供たちが石を投げて落しているのをよく見かけます。先に述べたように枝は折れやすいのです。でも、たいていはうまく当たらずに、何度も何度も同じことを繰り返しています。

実をとるといえば、高い木にスルスルと登ってとるので有名なのがココヤしです。ココヤしのジュースは腎臓にいいと言われていますが、まるで玉ネギと牛乳を混ぜたような臭いに圧倒されて、今だに私は好きになれません。でも青々と高く繁って風にそよいでいるその姿は南国情緒たっぷり

で、見るたびに「ああ、外国にいるのだなあ」としみじみ思います。

とにかく食物の話をしていたらきりがなくほど豊富です。野菜、くだもの、その中間的なもの、「こんなものが食べられるの？」って言いたいような木の葉っぱ、ザッとみても日本の三倍以上の種類があつて、どれも安くて栄養満点。例のメルカード（市場）へ行けば、一山五円とか十円でなんでも売っています。ここもごたぶんにもれず、臭くて汚なくて、はじめはこわかったけれど、慣れてしまえばおもしろい所です。

もう一つ、どうしても落せないのがマリスコス（海のもの）です。各種の新鮮な魚をはじめコンチャ（赤貝）、セルヴィチェ（大巻貝）、ランゴスタ（伊勢エビ）、カマロン（小さいエビ）、カニ、カキなど、どれも日本よりずっと安くて豊富です。特に海からとれたばかりのカキに塩とレモンをふって食べるのは最高。一ダースで二百円しないのですから、つつい食べすぎて、翌日は一日中ベツドで、ということになりかねません。

サルバドルニヨの商売 他の発展途上国とやっぱり同じだなあとと思うのは、上流階級と貧民との差があまりにもありすぎること。ほんの何%かの上流社会が国の政治、経済の実権をしっかりと握っているのですからどうしようありません。文盲率も高いし……。

商業に関しては、詳しくはわかりませんが、外国人にそうとうおさえられているようです。というのは、ここで私が紹介された、アラブ人、ユダヤ人、フランス人、ドイツ人などは、例外なく大きな商店の経営者でしたし、中国人も手芸品店や中華料理店など、狭いセントロだけでも十軒以上は確かにあるのですから。彼らはきつといい頭を持っていて商売上手なのでしょう。

サルバドレーニヨなんて先の見通しがきかなくて、たとえば、船の着く港から一コロン（約百二十円）で買ってきた魚を、一キロメートルほど離れた車のよく通る所まで運んできて、初めは二コロンとか言っているのですが、私たちが「あそこでは一コロンだったじゃない」などと少し強く言おうものなら、すぐ「じゃ、それでいい」なんて一コロンで売ってしまうのですから、なんのために重いのを運んでいるのかわからなくなってしまいました。

オレンジなどを買うときもそうで、一つ三十センチポ（約三十六円）と言われて、「たくさん買うから二十センチポにまけて」と言うのと、「それは絶対できない。二十五まで！」なんて言っているのに「じゃ、五個買うから一コロン（百センチポ）ネ！」と言うと、すぐOK。

万事、こんな調子ですから、彼らにできるのはほんとうに露店売りぐらいしかないのかしらとさびしくなってしまう。もっとも数学の勉強しなくちゃあ！

十四家族 そして、この上流階級と貧民の差をなくすのには、いつか大宅壮一氏が「アジア、アフリカの貧民をなくすのには、それが一つの方法かも知れない」と述べていましたが、やっぱり、一時的にしろ共産主義をとらなくてはならないのかなあと思っています。

以前、言葉が完全にわからないながらも、学校の生徒（成人学校なので、二十歳以上の生徒もたくさんいます）と「この国から貧乏をなくすには」ということについて話したことがあります。彼らが言うのには、「とにかく、ガンは昔から続いている大金持ちの十四家族で、すべての法律が彼らに都合よくできているのだから、一度それらを取り払い、全国民が平等にここの資源や経済の恩恵を受けられるようにしたい。それには、キューバのように共産主義にしなければダメだ。」